

第 6 回

学生震災意識調査報告

創価学会 東北学生部

調査背景

震災から10年を迎える今、社会では、度重なる災害やコロナ禍など、多くの困難に直面している。

本調査では、そうした「今」を生きる東北の学生の声を集約し、震災を“自分事”として捉え、これからの社会について考える一助とする。

調査概要

- ◆主 催：創価学会 東北学生部
- ◆調査期間：2020年9月19日～2020年11月18日
- ◆調査対象：東北地方の大学・専門学校生
- ◆調査方法：インターネット調査（WEB回答）
- ◆回収結果：302名（有効回答数296名）
- ◆調査校：50校

アンケートの構成

各5問 × 4テーマ = 合計20問

【基本情報】 年齢、性別、学校名、出身地(都道府県)

【これまで】 震災に対してどのように向き合ってきたか

【いま】 現在はどう感じているのか

【これから】 未来に伝えるべき教訓は何だと思うか

調査の視点

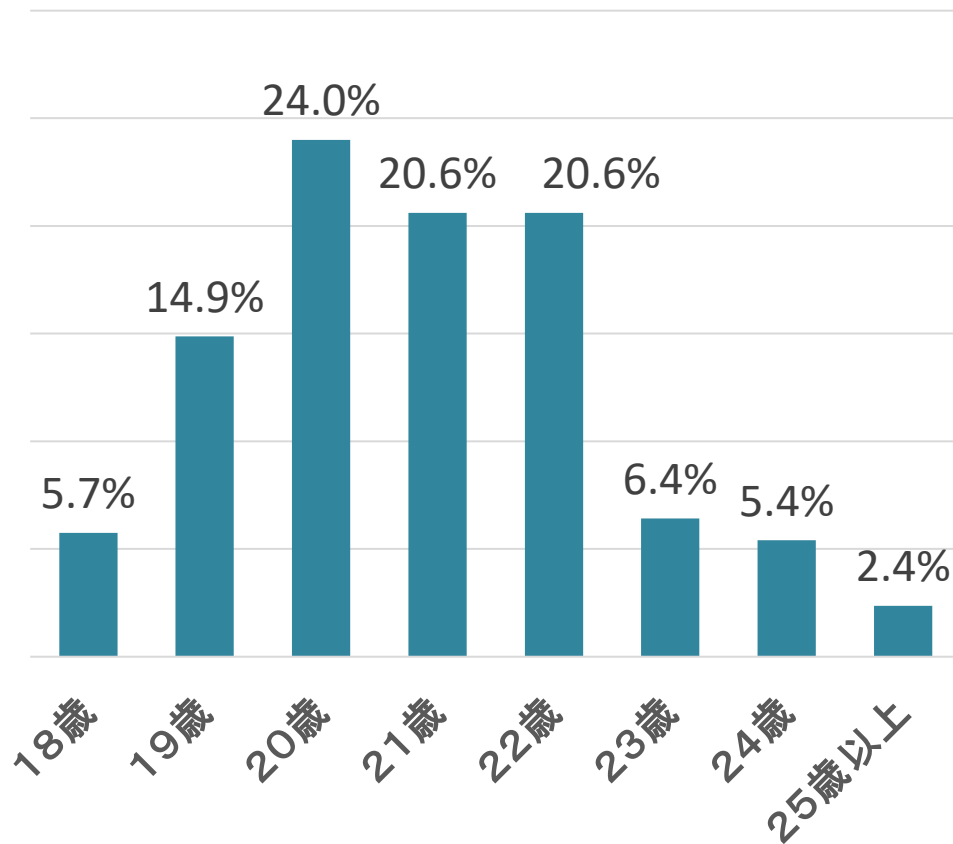
風化・・・自分事として捉えられているのか
本当に困っている人が置き去りにされている

情報・・・情報を得る手段やその内容に偏りがある
得た情報の裏側にまで目を向けられているか

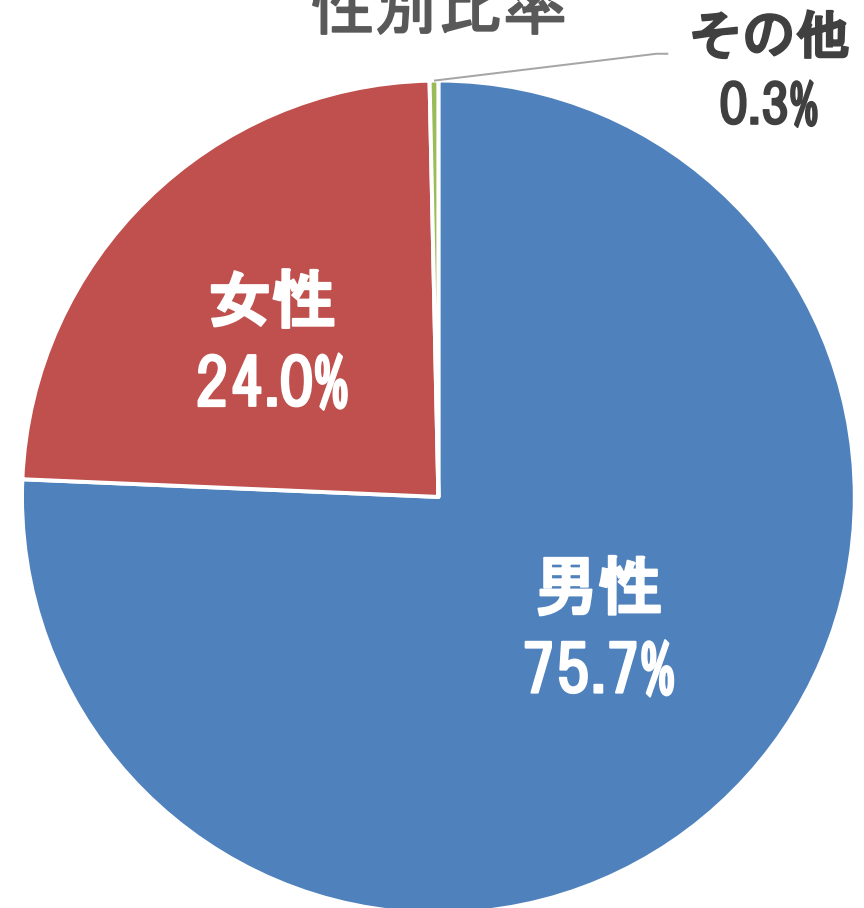
教訓・・・コロナ禍や度重なる災害の中、
震災から学び、いかせることはあるか

回答者基本情報(1)

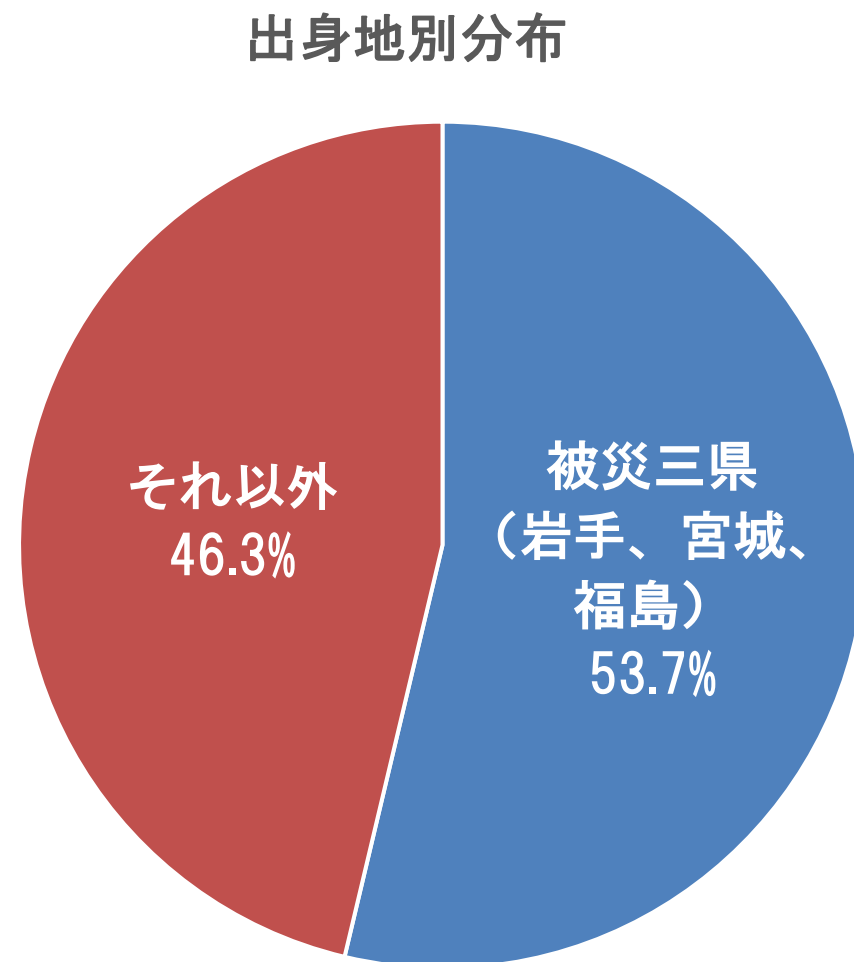
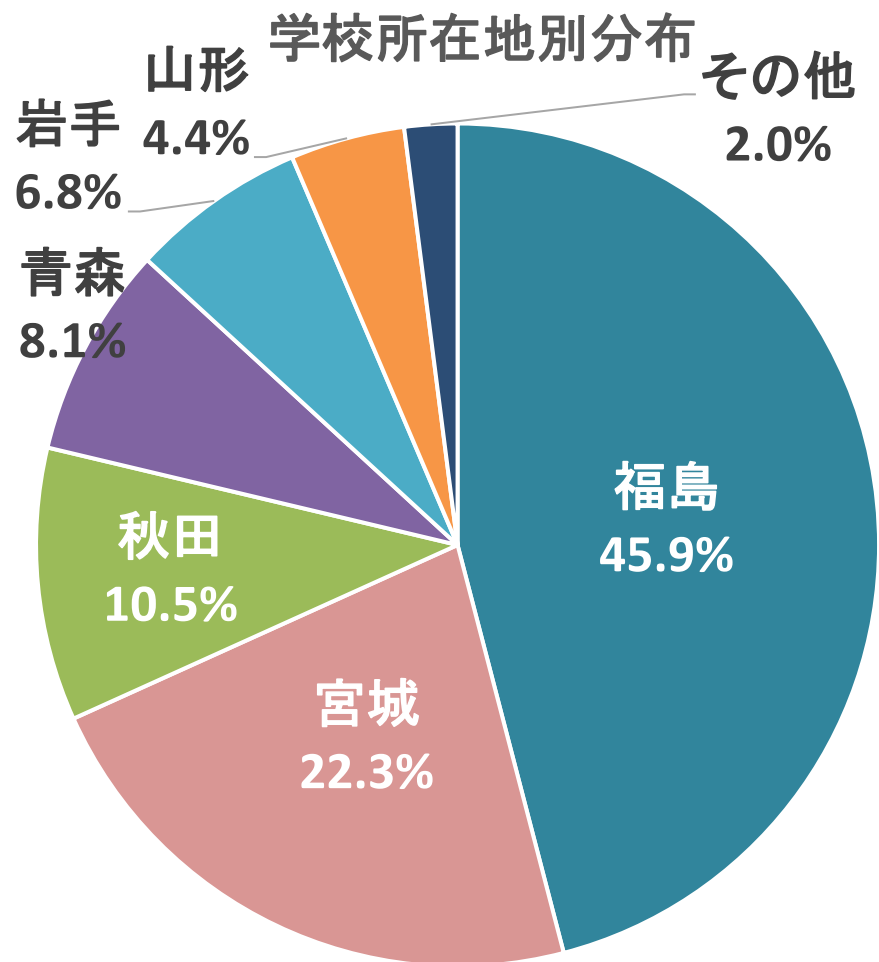
年齢別分布



性別比率

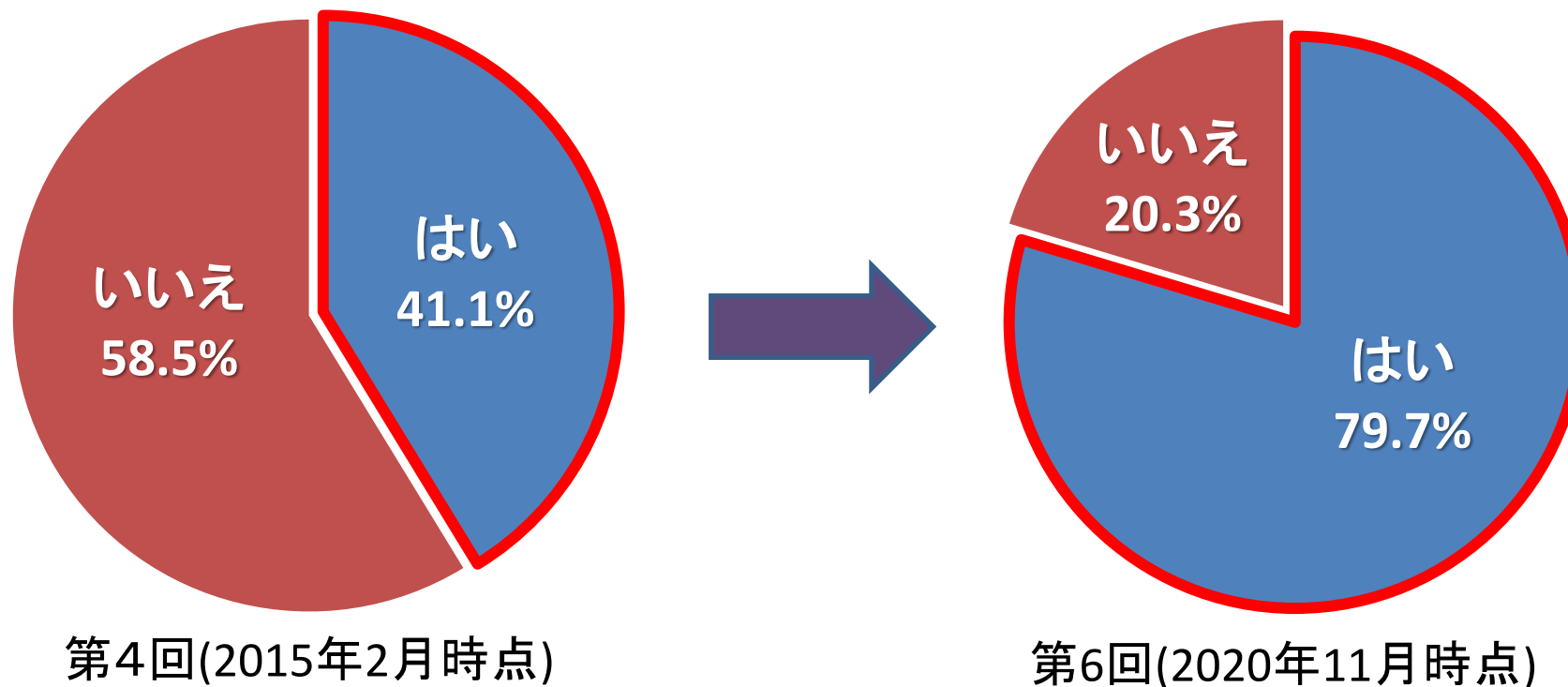


回答者基本情報(2)



Q3. 復興は進んでいると思いますか？

第4回の結果と比較すると、「はい」の回答が41.1%から79.7%へと大きく増加。



Q4. そう答えた理由は何ですか？

はい

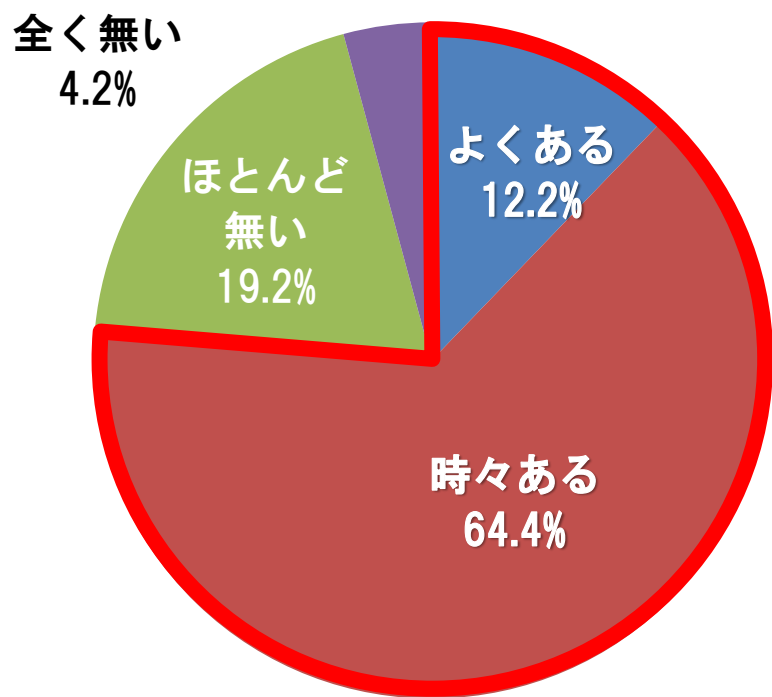
- ・沿岸部の街並みや建物の再建
- ・被災地のインフラの復旧
- ・どちらかといえば復興は進んでいる
- ・テレビ、ニュースでの報道を見て
- ・避難区域から解除された地域もある

いいえ

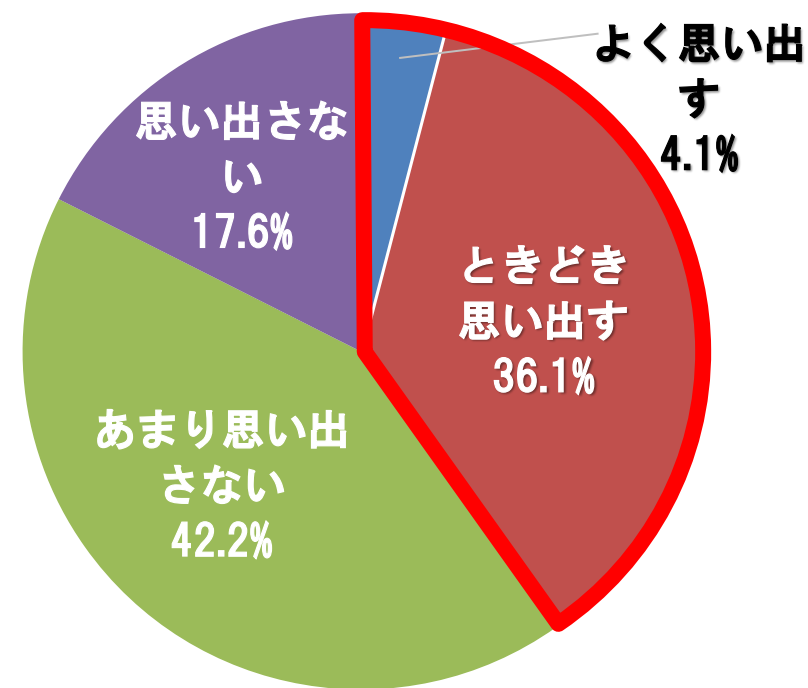
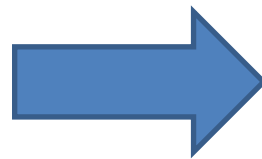
- ・メディアで復興の話題を聞かない
- ・原発問題が解決していない
- ・まだ避難している人がいる
- ・被災地の整地が進んでいない
- ・心の復興がまだ進んでいない
- ・元の暮らしができていない方々もいる

Q6. 日常の中で震災のことを思い出すことはありますか？

第4回では、「よくある」「時々ある」が合わせて**76.6%**であったのに対し、今回は「よく思い出す」「ときどき思い出す」が合わせて**40.2%**と大きく減少。全体の**約6割**が日常の中で震災をあまり思い出さないという結果になった。



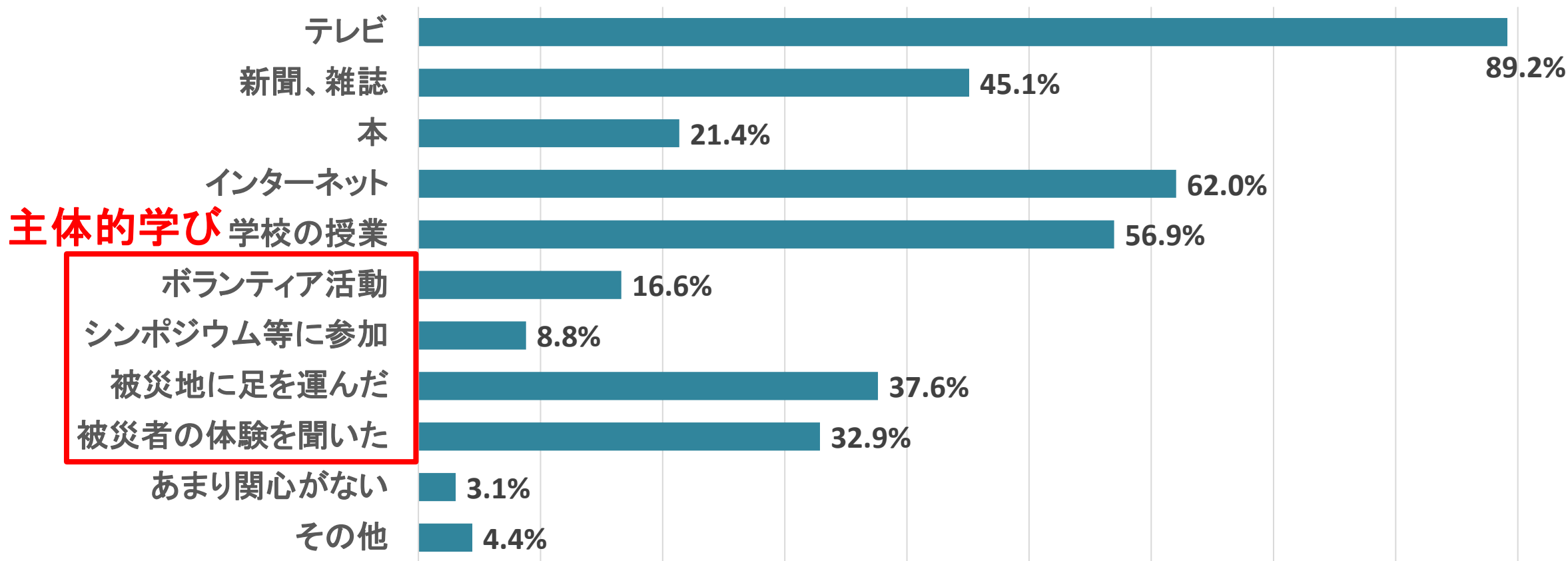
第4回(2015年2月時点)



第6回(2020年11月時点)

Q7. 震災のことをこれまでどうやって学んできましたか？ ※複数選択可

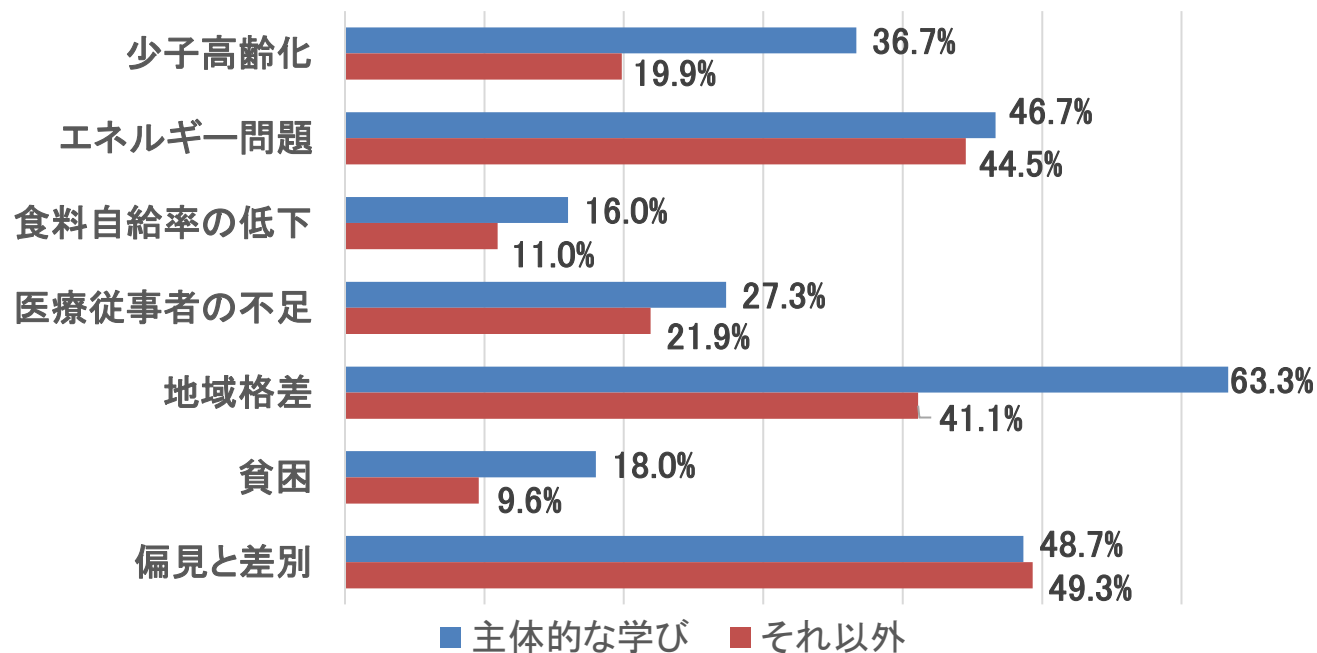
「テレビ」「インターネット」「学校の授業」などの項目では選択率が高くなっていた。その一方で「ボランティア活動」「シンポジウム等に参加」などは選択率が低かった。



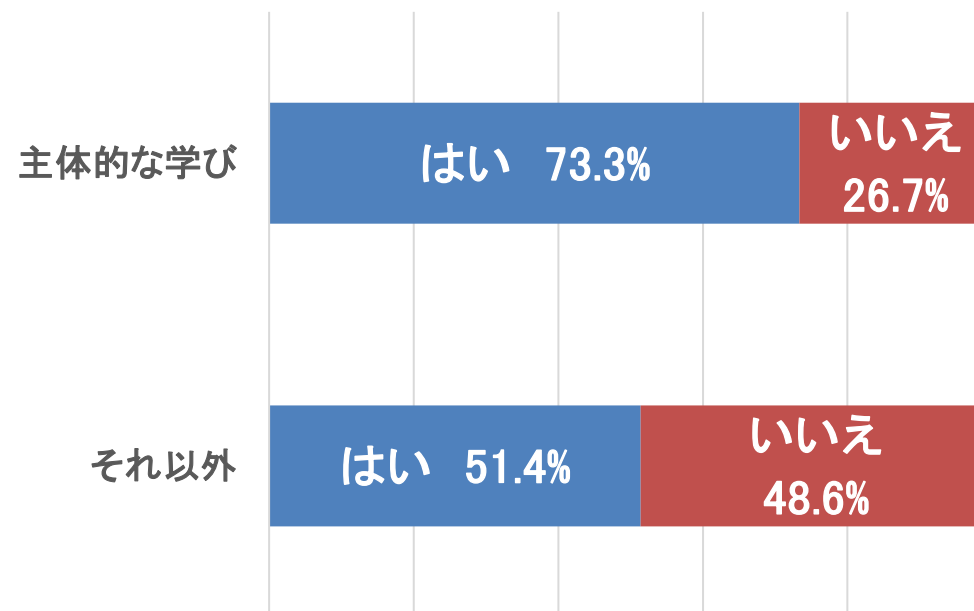
[参考] 震災についての学習手段に関する回答比較

「震災で浮き彫りになった社会的課題」を見ると、主体的学びをしている人は全体的に項目選択率が高かった。また、「今後さらに震災について学ぼうと思うか」についても「はい」の割合が高くなっていた。

震災で浮き彫りになった社会的課題※複数選択可



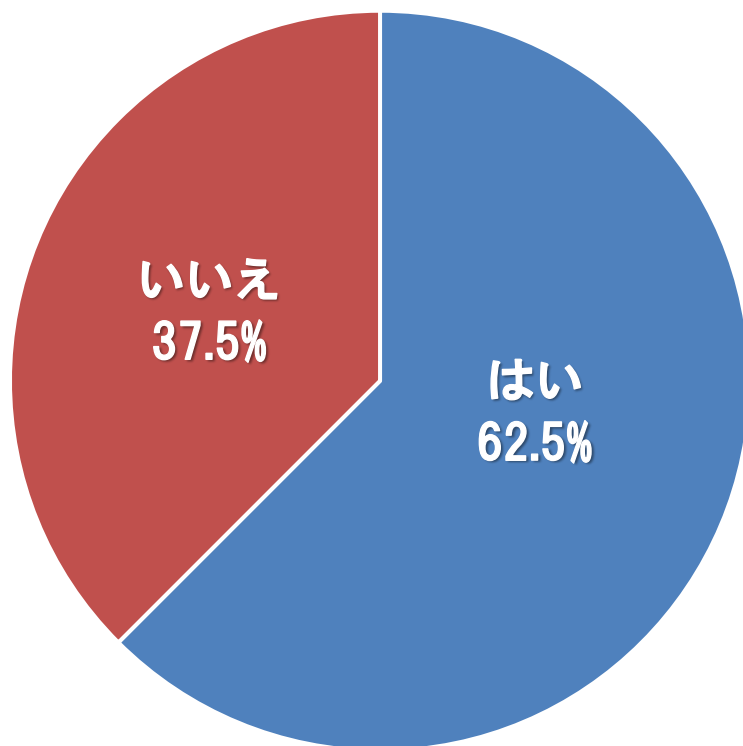
今後さらに震災のことを学ぼうと思うか



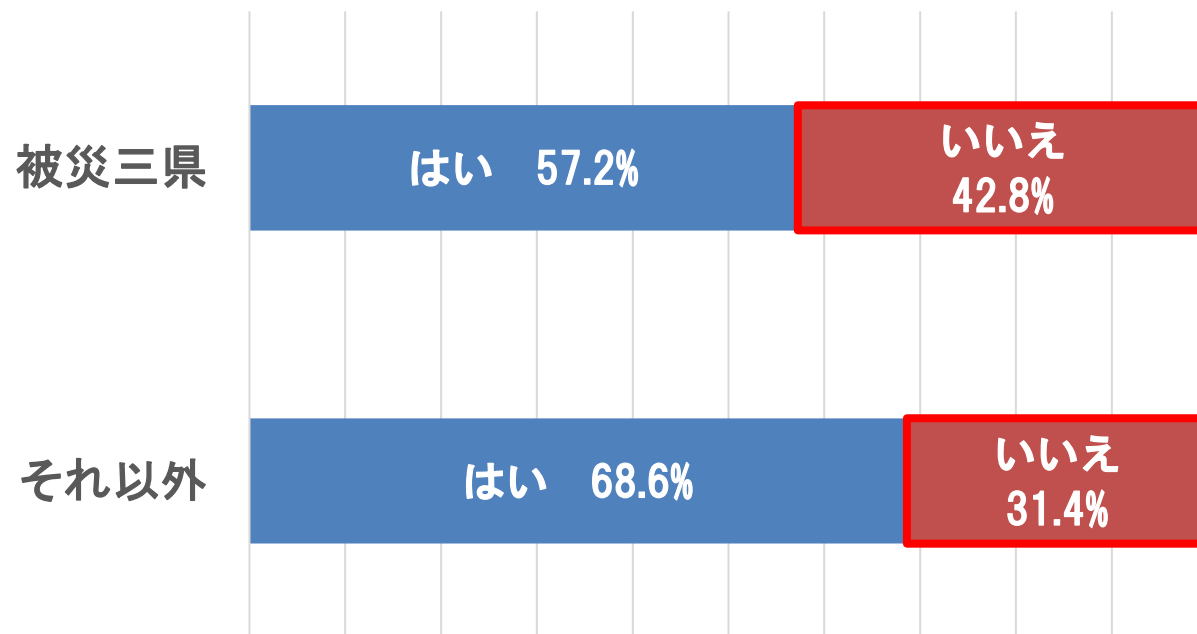
Q8. 今後、さらに震災のことを学ぼうと思いますか？

「はい」が**62.5%**、「いいえ」が**37.5%**となっていた。出身地別で回答を比較すると、被災三県出身学生は、それ以外の出身学生と比べて「いいえ」の回答率が高かった。

全体の回答



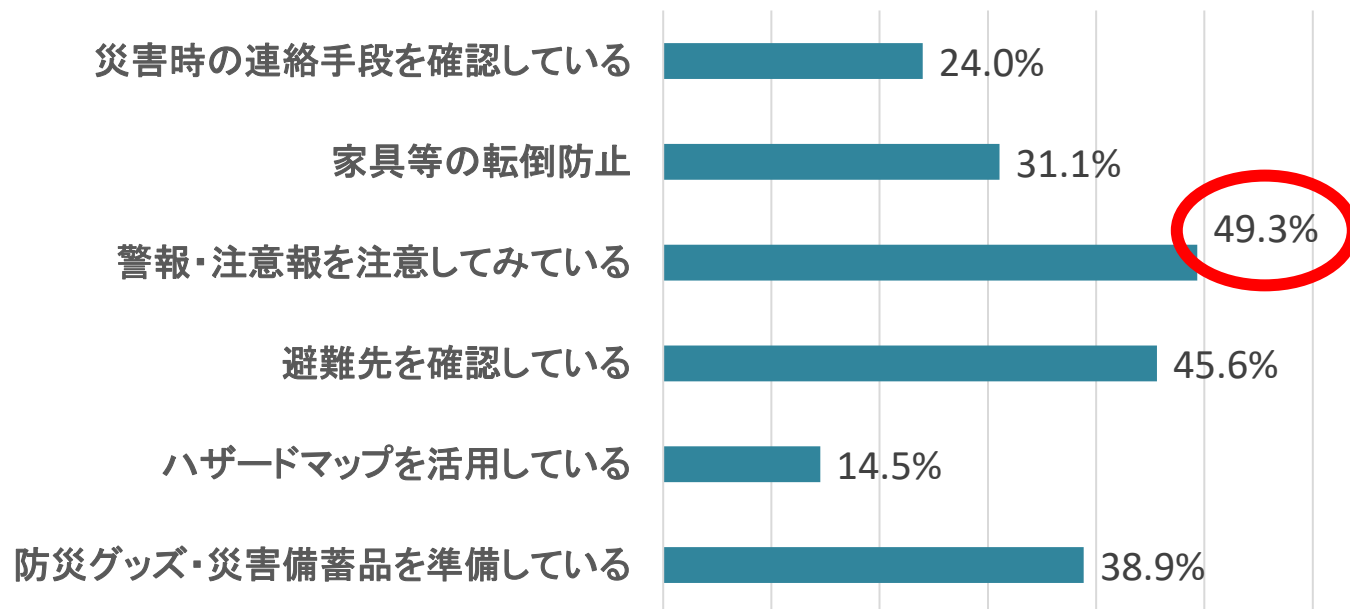
出身地別の回答比較



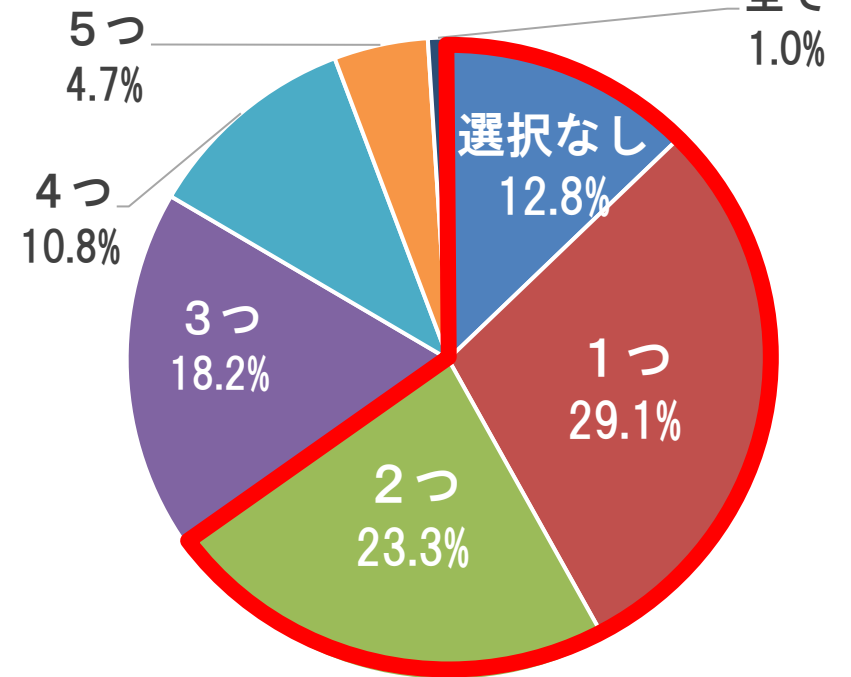
Q10. 災害への備えとしてやっていることはありますか？※複数選択可

最も選択されている「警報・注意報を注意してみている」でも5割を下回っていた。
1人当たりの項目選択数をみると、選択数が少なかった「選択なし」、「1つ」、「2つ」と回答した人が全体の約65%にも上っている。

全体の回答



1人当たりの項目選択数 全て



Q13. あなたが未来に残していきたい震災からの教訓は何ですか？

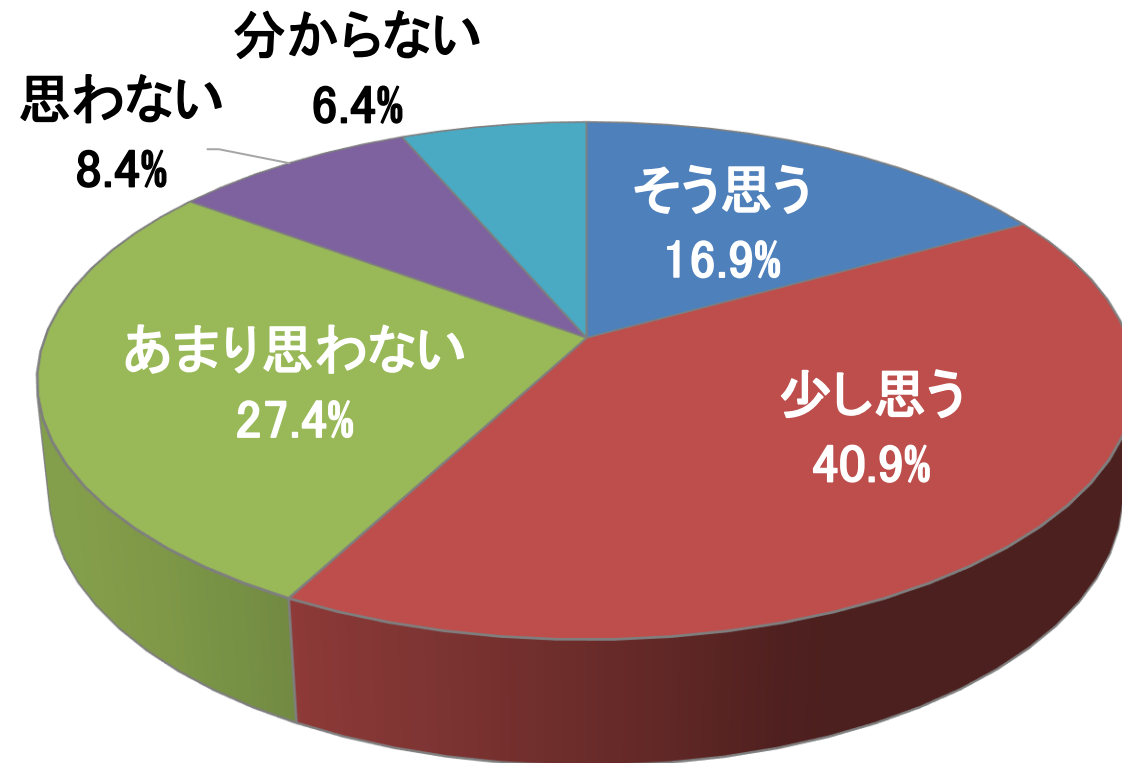
<主な回答>

- 命の尊さ、はかなさ、日常のありがたみ
- 助け合うことの大切さ、思いやりの心の大切さ、人と人とのつながり
- もしものための備えを怠らないこと、日常からの備えと訓練の大切さ
- 自然の怖さ、自然との向き合い方
- 正しい情報を得ること、発信することの大切さ
- 風評被害の深刻さ
- 教訓を伝え残していくこと、後世に語り継いでいくこと

(回答数 248/296)

Q15. 昨今、度重なる災害やコロナ禍など、各地で被害が出ています。
今後起こりうる災害や未曾有の事態に強い社会を築いていけると思いますか？

「**そう思う**」「**少し思う**」と回答した人が合わせて**約6割**となっていた。



結 論

<風化>

過去5回の調査と比較して、震災に対する意識は徐々に薄れ、“自分事”として捉えることが難しくなっている。

<情報>

場所や環境などに関係なく、誰もが簡単に情報を得られるようになっているものの、受け身の情報が多く、主体的な学びが必要。

<教訓>

一人ひとりの中に多くの普遍的教訓があり、それを語り継いでいくことが重要。

今後の展望

- 次の10年に向けて、定点観測を継続し、なかでも「復興」をどうとらえていくかの視点で議論を重ねていきたい。
- 被災三県の中でも、内陸部と沿岸部で違いがあると考えられる。より地域を細分化しての調査も実施したい。

「大学は大学に行けなかった人のため」との池田先生のご指導を胸に、私たち自身が震災を自分事として捉え、主体的な学びを実践し、誰も置き去りにしない社会へとつなげていきたい。

ご清聴ありがとうございました